



TITLE:

奇形歯に関する研究とくに円錐歯
の形態病理学的研究(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

吉田, 正路

CITATION:

吉田, 正路. 奇形歯に関する研究とくに円錐歯の形態病理学的研究. 京都
大学, 1962, 医学博士

ISSUE DATE:

1962-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210864>

RIGHT:

氏 名	吉 田 正 路 よし だ まさ みち
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 2 5 号
学位授与の日付	昭 和 3 7 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	奇形歯に関する研究 とくに円錐歯の形態病理学的研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 鈴 江 懐 教 授 岡 本 耕 造 授 授 美 濃 口 玄

論 文 内 容 の 要 旨

人類歯牙の奇形の一種に円錐歯とよぶものがあり、これを摂取する食物の変遷推移に順応した歯の退化形とする者がある。これはとくに上顎の側切歯、上下顎の智歯および過剰歯などに現われ、また *Anodontia congenitalis partialis* の際などにも見うけるものである。ゆえに系統発生学ないし歯の形態学の分野においては重要な意義を蔵しているものといわなければならない。しかるに多数の円錐歯を蒐集し、これを資料として広く深く形態学的研究を試みたものはほとんど見あたらないといっても過言ではない。

そこで著者は、大阪歯科大学口腔病理学教室所蔵の部位ならびに萌出状態の明確な円錐歯の多数例を研究材料として、これを系統的に分類し、肉眼的ならびにレントゲン像による観察を行ない、興味ある若干の新知見を収めた。

以下その成績の概要を列記すると

- 1) 円錐歯を萌出部位によって次の5群に分類した。すなわち、1, 退化型円錐切歯 2, 正中歯 3, 前歯部過剰円錐歯 4, 退化型円錐臼歯 5, 臼歯部過剰円錐歯。
- 2) 以上の分類による出現頻度は、前歯部過剰円錐歯が最も多く、臼歯部過剰円錐歯、正中歯、退化型円錐切歯、退化型円錐臼歯の順位であった。ゆえにこの点から、円錐歯は退化型よりも、過剰歯のほうが出現度の多いことがわかった。
- 3) 円錐歯を歯冠の形態により次のように分類した。1, 単錐形 2, 2錐形 3, 3錐形 4, 蕾状(多結節)。
- 4) その出現頻度は、有歯模型と上・下顎の石膏模型を総合すると、第1型の単錐が最も多く、2錐、蕾状(多結節)、3錐の順序に少なかった。
- 5) 円錐歯所有の石膏模型の研究成績では、その円錐歯の各部の計測値と秤量値は退化型円錐歯と円錐型過剰歯を比べると、退化型円錐歯が円錐型過剰歯よりも発育の劣勢であることがわかった。
- 6) かつて他人により抜かれた円錐歯は、その萌出部位の判定はもとより、その歯の唇、舌面や近・遠

心面の弁別は困難なものといわれていた。この点にかんがみそのよりどころを求むべく、円錐歯の歯冠形態を豊隆、凹陷、隆線、溝、尖頭(切縁)、歯頸線彎曲について検討した結果、円錐歯の各面における次の歯頸線彎曲の形態的差異が有要目標をなすことがわかった。

7) すなわち歯頸線彎曲の形態を展開図によって観察した結果、その唇面ないし舌面の歯頸線彎曲はV字型のものが多いのに、近・遠心の両面は水平ないし低い波状のものが圧倒的に多いので、この性状によって円錐歯の歯面の識別が可能である。また、歯頸線彎曲の形態は前歯部の円錐歯では、曲線の穹隆が著明であるのに、臼歯部の円錐歯では曲線が緩徐で低い波状ないし水平であることによって鑑別すればよい。

8) 円錐歯を、その歯冠の最大部で水平断面を作り、そこのエナメル質の厚さを計測し、これによって唇、舌側の区別をなし得るか否かを観察したが、正常歯に同じく唇側が舌側よりも厚いことがわかった。

9) レントゲン像により、歯髓腔の形態を観察したが、歯髓腔の大きさは総じて広大な幼若性状のものが多く、老朽狭さく性状のものは少なく、その根管は全例とも単純根管であった。

10) 円錐歯の萌出状態は、上顎では、歯列弓外で、その舌側に位置するものが最も多く、歯列弓内のものがこれにつき、歯列弓外で、その唇側に位置するものが最も少なかった。また、下顎では歯列弓外でその舌側に位置するものが最も多く、唇側はこれにつき、そして歯冠は唇側に傾斜し、隣在歯に密接して萌出しているものが多かった。

論文審査の結果の要旨

人類に見られる円錐歯は奇形歯の1種であって、このような種類の歯牙は通常魚類や爬虫類などの低級な脊椎動物が持っているものである。それで、このような歯牙の多数を蒐集していろいろの方面から研究することは、単に口腔病理学のみならず、広く生物学的にも興味あることと考え、著者は掲題のような研究を試みたのである。

もともと円錐歯自体は発達度低く、つねに小形で、形態も単純な原始歯形で、これが人類の生活様式の推移に順応しつつ現在のように複雑化したものと考えられているが、従来の業報は少数症例のものが大部分であって、多数の円錐歯について、その形態ならびに萌出状態などを病理解剖学的に精査したものはないと言うも過言ではない。著者の今回の69症例についての検索は、この点からみてもはなはだ注目値する。

研究成績としては多くの興味ある事実が提示されているが、まづ円錐歯はその萌出部位によって5種類に分類され、その出現頻度は前歯部過剰歯が最も多く、退化型円錐臼歯が最も少なく、また退化型よりも過剰歯としてのものが多くことが知られた。また円錐歯は歯冠の形態から、単錐型、2錐型、3錐型、多錐型などの4型に分別され、単錐型が最も多く3錐型が最も少ないということを認めた。

また、いったん抜き去られた円錐歯は、かつての萌出部位はもとより、その唇面、舌面、近心面、遠心面などの弁別も困難とされているが、著者は歯頸線彎曲の形態を展開図によって観察し、その曲線の波形によって歯面の鑑別を可能ならしめ、また最大厚径部の水平断面で舌側よりも唇側が厚いエナメル質を持つことで歯面の判別をなし得ることを示したことなどは本研究中の最も重要な新知見である。

以上のほかにも、著者は人類円錐歯につき種々興味ある検索結果を提示しているのであって、口腔病理学上寄与するところのものが多く。

したがって、この論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。